

# 国際理解に関する学習とキャリア教育との横断を図った 総合的な学習の時間の教育効果に関する実践的研究

## Practicing Research that Attempts Study Concerning International Understanding and Crossing of Career Education in the “Period for Integrated Study”

石井 義史

千葉県立磯辺第三小学校<sup>1</sup>

本稿では、総合的な学習の時間における国際理解に関する学習での「かかわりあい」に焦点をあて、学習過程上の課題を明らかにすると共に、キャリア教育との横断を図りながら単元構成をすることが児童の主体的な学びを志向する上で有効であることを提案する。まず、総合的な学習の時間における学習過程上の課題や国際理解に関する学習の学習方法上の課題を論じ、その後、実社会の専門家の有効活用の方策を提示している。児童の振り返りコメントからの変容を自己内省力という指針で分析し、課題設定におけるかかわりあう力を意識した単元構成の有効性を小学校6年生の実践例を元に提示している。

**キーワード**：国際理解に関する学習、キャリア教育、かかわりあう力、自己内省力、キャリアカウンセリング

### 1. 研究主題について

平成20年3月に告示された新しい学習指導要領は「生きる力」を再掲し、『理念』は変わりません。『学習指導要領』が変わります。<sup>2</sup>と謳った。文部科学省の言葉を借りれば「バランス」を重視した学習指導要領だ<sup>3</sup>という。つまり、確かな学力の育成のために「習得」と「活用」で教科学習を行い、総合的な学習の時間には「探究」の学びを担わせようというものである。また、今回の学習指導要領の改訂では、総合的な学習の時間は、授業時数が年間70時間となった。時数の削減に注視されがちであるが、総合的な学習の時間は、PISA型読解力の育成、生きる力の育成の双方からも高い評価を得ており、教科領域、特別活動等との関連を強調し始めている。自ら学び、自ら考える力や学び方、主体的に取り組む態度を育てるには、まさに、教科・領域の枠を越えて取り組むべきものなのであろう。ゆえに、これまで問題視されていた学校間格差、ねらいや育てたい力の不明確さ、教科学習への転用や行事準備などの混同を避ける必要性から、10年間の実施状況を踏まえて、改めて総合的な学習の時間の充実と発展が問われているのである。

上記のような問題同様に、キャリア発達諸能力意識調査(第2章4.5)からみられる実態から、子どもたちには、異年齢や学校外の社会とのかかわりが十分ではないという現状がみられる。そこで、自立意識や社会性を伸ばすためには、様々な社会とのかかわりを早い段階から持たせることが必要であり、そのためにキャリア教育との横断を図った実践が重要であると考えられる。

また、従来行われてきた国際理解に関する学習では、世界

の文化に触れ調べる活動から、知識習得型の実践や、英語活動との混同をしているような実践も多く見られた。しかし、本来国際理解に関する学習では、外国の人のことを「自分のこと」として課題意識を持つ必要があり、知識伝授型の学習から、実社会から内容を共感的に理解し行動できるような児童の育成が望まれているのである。

一方、新学習指導要領では、総合的な学習の時間の内容の取り扱いについて、「日常生活や社会とのかかわりを重視すること」「自分自身にかかわること」「他者や社会とのかかわること」が加えられた。これは、総合的な学習の時間はキャリア教育と大いに関連が強く、その要素を取り入れることが、総合的な学習の時間のねらい達成のために有効であると考えられる。そこで、総合的な学習の時間の学習過程内にキャリア教育でいうところの「社会とよりよくかかわりあう力」の育成を意図的に構成する。その上で、自己理解・他者理解や自己内省力の向上が学びにあたる教育的効果について検証をする。本研究が、実社会や実生活と双方向にかかわりながら、子どもたち一人一人が学ぶ意欲の高まりを自己認識し、探究的な学びにつながる深化した総合的な学習の時間のあり方を明らかにする一端になるのではないかと考え、本主題を設定した。

なお、実践校は日本語学級の設置校であり、青少年赤十字に長年加盟してJRC活動(青少年赤十字活動)に積極的に取り組んでいるという特色がある。また、海外帰国子女や留学生の子息がどの学年にも在籍し、学級担任として異文化理解の必要性を感じている職員も多い。そこで、学校の特色を生かし国際理解に関する学習を窓口にした、キャリア教育との複合的なカリキュラム開発を行う。

## 2. 研究の目的

実社会とかかわらせるような学習内容や友達との双方向にかかわりあうような学びの過程を構成することが、学習意欲の向上や探究的・協同的な学びに有効であることを明らかにし、その方策として国際理解に関する学習とキャリア教育を関連付けた総合的な学習の時間の工夫・改善をする。

## 3. 研究の背景

### 3.1 研究の前提

本来国際理解に関する学習には、知識だけではなく体験的な学習や課題解決学習を多く取り入れる必要があるといわれており、実践的な態度や資質、能力の育成に力を入れていかなければならない。実践的な資質・能力の育成に重点を置いた国際理解に関する学習とキャリア教育のキャリア発達にかかわる資質・能力との関連を考えると、図1の目標図に示したように整理できる。

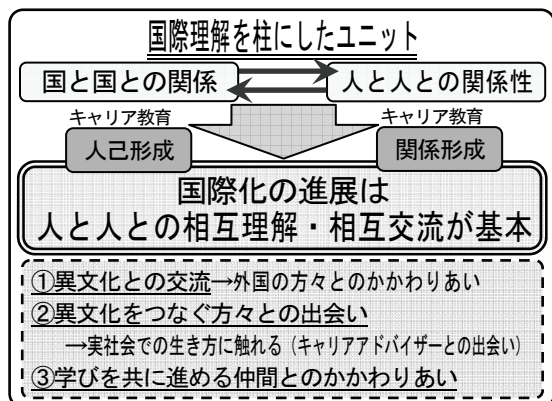


図1 かかわりあいからみた目標図

国際社会における「国と国との関係」は元をたどれば「人と人との関係」の関係に帰着し、その資質を備えた人間を育成するには、人と人の相互理解、相互交流なくしては立ち行かない。キャリア教育でいうところの「自己形成」「関係形成」の育成とも重なり、国際理解に関する学習との接点が多いことがわかる。つまり、国際理解に関する学習を柱にしたキャリア教育を考えると、実社会と多様にかかわる学びが必要なのである。そこで、本研究では共感的に社会と「かかわる」ことを織り込んだ実践開発を構想する。

### 3.2 国際理解に関する学習における「かかわりあい」の視点からのねらいと「生きる力」

国際理解に関する学習は「総合的な学習の時間」の横断的・総合的課題の一つとして位置付けられ、「生きる力」の育成を踏まえたうえでの実践が求められている。

新学習指導要領解説には、「総合的な学習の時間」における国際理解に関する学習については、「問題の解決や探究活動に取り組むことを通して、諸外国の生活や文化などを体験したり調査したりするなどの学習活動が行われるようにす

ること」と示されている。「かかわる力」との関連を踏まえ波線部分には、以下の3点のねらいをもって教育を進める必要性が内包されていると考える。

- ①「かかわりあい」をもとに、広い視野を持ち、異文化の理解をするとともに、これを尊重する態度や異なる文化を持った人々と共生していく資質・能力の育成を図ること
- ②「かかわりあい」をもとに、日本人として、また個人としての自己の確立を図ること
- ③「かかわりあい」をもとに国際社会において、相手の立場を尊重しつつ、自分の考えや意思を表現できる基礎的な力を育成する観点から、コミュニケーション能力の育成を図ること

このように、学びに対して「よりよくかかわりあうこと」こそ「生きる力」に収束していくのだと推測する。

### 3.3 「総合的な学習の時間」における学習過程上の課題

「総合的な学習の時間」の学習過程には、およそ次のような要素がある。

- ①【課題の設定】体験活動などを通して、課題を設定し課題意識を持つ
- ②【情報の収集】必要な情報を取り出したり収集したりする
- ③【整理・分析】収集した情報を、整理したり分析したりして思考する
- ④【まとめ・表現】気付きや発見、自分の考えなどをまとめ、判断し、表現する

総合的な学習の時間では、「活動あって学びなし」といわれる活動自体が主目的になってしまっている実践や、目的意識も明確にされないまま調べ学習をしている実践こそ課題であるといわれる。

原田信之（岐阜大学）は探究の過程と自己の生き方の関係（図2）を、かかわりやコミュニケーションが「共に生きる力」を伸ばし、自己有用感を高めたり学ぶ意味を自己認識したりすることが「よりよく生きる力」を伸ばすものであると整理している。また、それらは学びの連鎖を経てともに高まっていくものであると示している。このような自己の生き方を高めていく総合的な学習の時間には、課題設定が鍵であり、学習過程の要素②～④に重要にかかわる要因と考える。そこで本実践では、要素①【課題設定】に重点を置いた学習過程を構成する。

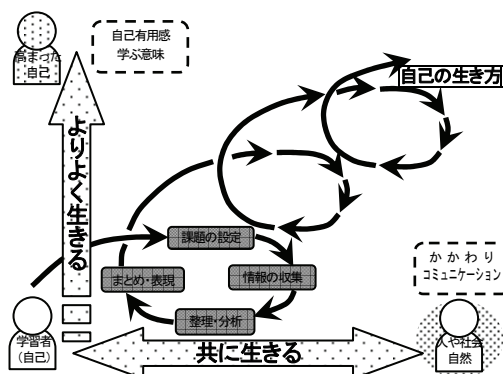


図2 探究の過程と自己の生き方（岐阜大学原田信之 2008）

### 3.4. 国際理解に関する学習方法上の課題

国際理解に関する学習の過程で課題となるのは、①遠い世界のできごと（グローバル・イシュー）や外国の人のことを「自分のこと」として課題意識を持つこと②学習を通して「自分の生き方」につながる思考や行動、実践力を身につけるようにすることの2点である。そこで、子どもたちには、知識伝授形の授業を避け、子どもの主体的な学習活動を支援し、内容を共感的に理解できるような学びを学習過程上に意図的に構成することが必要である。しかし、多様な学習活動は、活動そのものが自己目的化しやすいため、子どもたちの主体的な学び（本実践ではゼミナール方式を取り入れる）を志向しなければならない。

### 3.5. キー・コンピテンシーをもとにしたキャリア発達諸能力意識調査からみられる児童の実態

本校の児童は、同世代との関係性は緊密であるものの、かわり方が浅かったり、異年齢でのかかわりや、学校

表1 キー・コンピテンシーをもとにした意識調査の内容

※選択肢は「とても思う」「わりと思う」「あまり思わない」「ぜんぜん思わない」の4段階

個人の自律性と主体性	ウ	わからないことはそのままにせず、自分で調べたり、詳しい人に聞いたりするほうだ
	カ	自分で決めたことは最後までやりとげるほうだ
	ク	生活や学習で課題や問題を見つけたら、自分の力で解決しようがんばる
自己と他者の相互関係	ア	自分や友達のよいところを見つけるのが得意で、自分や友達のよいところを生かしている
	イ	思いやりの気持ちを持ち、いつも相手のことを考えて行動している
	キ	係活動やグループ学習では、自分のしたい係（仕事）や自分にあった係（仕事）を選んでいる
個人と社会の相互関係	エ	委員会・係・そうじ分担などきちんとすることは、みんなの生活にとって大切だ
	オ	社会にはいろいろな仕事があり、地位や収入に関わらず、どの仕事も大切だ
	ケ	将来つきたい仕事がある

外の社会とかかわったりすることが十分とはいえない。過去の実践を振り返ってみても、自己や他者の適性を見極め、自他のよさを認め合ったりする中で学習を進めることや、課題を練り上げ、ゴールを明確にした学びは、個々の児童のモチベーションを維持向上させる上で有効且つ不可欠な要素であった。そこで実践にあたり、児童の実態を具体的に捉える必要があると考え、キャリア発達の4領域8能力を日常生活に照らし合わせ職業観を加えた9内容項目を、キー・コンピテンシーをもとにした

個人の自律性や相互関係で3つに類別した意識調査(表1)を行った。

集計結果(図3)を見ると、半数以上の児童が個人の自律性と主体性においてプラス回答をしているが、自己と他者の相互関係においては、(ア)、(イ)の結果から他者との相互関係が十分築けていないことがわかる。これは、多様で幅広い人間関係を築いたりその中に入っていったりすることに慣れていないことが、自立意識や社会性を未発達にしているものと考えられる。また、(エ)、(オ)のプラス回答が多い結果については、多くの児童が、学校生活や社会にはいろいろな仕事があることを認識し、係活動や当番活動は大切であり、地位や収入に関わらずどのような仕事も大切であると考えている。

しかし、(ケ)の結果から、就きたい仕事ははっきりしていない児童も半数程度おり、記載させた職種名やその記載数から、知っている職種は可視化された仕事が多く、その種類も少ないことがわかった。

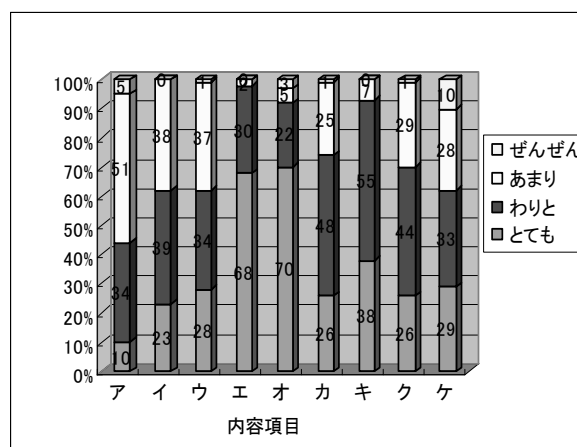


図3 キーコンピテンシーをもとにした意識調査

そこで、国際理解にかかわる学習を通して、日常あまり接点のない仕事に従事しているゲストと出会うような工夫をする。途上国支援をしているような大人とのかかわりを持つことは、社会の一員として生きがい働きがいをもつことの素晴らしさを伝えてくれるであろう。そして、これまでの利己的な夢が「役にたちたい」といった利他的に夢へ変容し、社会に貢献する態度が育成されるものと期待する。日常的に出会う機会の少ない仕事に携わる大人との出会いこそが、キャリア教育でいう人間関係形成能力を高め、社会人としての自立意識を醸成していくだろう。

### 3.6. 学習集団におけるキャリアカウンセリングの効果

キャリア発達という側面子どもたちをみると、自分で思い描いている自己像や将来の生き方に対する考え方は、必ずしも現実のもの一致していない場合が多い。しかし、不一致な部分こそ学びの中で直面した疑問や課題となっていく。その疑問や課題を自らの力で解決することで初期段階のキャリアが形成されていくのである。それは、自己理解や他者理解をベースに自分の課題を解決していく経験を積み、以後の学びのなかで、効果的に協同学習していこうという態度が育つだろう。また、課題解決での教師の支援を進んで得ようとする学びの主体性をも形成されていくだろう。このように、他者との関係性や他者からフィードバックして得られる自己認識など、他者とのかかわりを意識した上で問題を把握し、手立てを導いていくキャリアカウンセリングを取り入れた学習プログラムは有効であると考えられる。

### 3.7. 課題設定における「かかわりあい」

総合的な学習の時間においては、いかに子どもたちが主体的に探究できる「課題設定」ができるかが鍵となる。そこで図4(児童の課題設定の方法)のように、「実社会で問題となっている素材に出会わせること」、「異なった視点を持つ人との出会いの場を持つこと」、「素材を通して継続的に実社会の人と双方向のかかわりがもてるようにすること」を提案する。

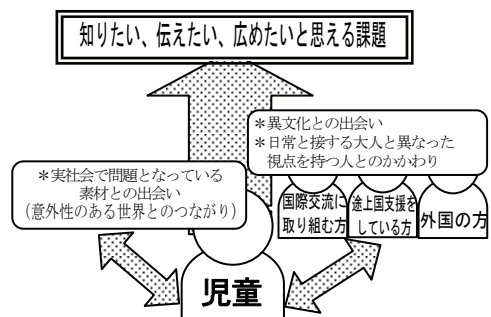


図4 児童の課題設定の方法

子どもたちにとっては、「人」という存在は大きく、心動かされる場面が学校生活の中でも多いからである。「人」は、児童に直接的に訴え、しかもお互いに「双方向の関係」を持たせることが可能な素材である。教師とは違った立場、態度で子どもたちに接し、教師とは違った視点で子どもたちを評価してくれる。このような課題設定にかかわる場面での「人」の活用こそ、学びの多様性とキャリア教育でいうところの「生き方」を伝えてくれる手立てとなりうるであろう。

### 3.8. キャリアアドバイザー（専門家・実社会の大人）の有効活用とコーディネーターの役割

実社会とのかかわりを持たせる学びを構築していくためには、地域社会の協力、実社会との接続なしにはありえない。しかしながら、予算、校内事情、日々の激務、校内研究などなかなか動き出せない現状である。いかに効率的に、実社会とのかかわらせる機会を創出するかが鍵となるが、本実践では、この橋渡しを数年前から続けている NPO 企業教育研究会（藤川大祐氏主催）、教育貢献に動き出している実社会の専門家の方々（今回は国際交流や途上国支援、貿易の仕事などに携わるの方々）を活用した学習プログラムを示したい。

また、コーディネートする上でのポイントは、児童との学習活動の前に指導者自身がキャリアアドバイザーと十分「かかわりあう」ことである。人間としての「理解」と「共感」を得て、学習活動の目的を明確に示し、その目的に沿った学習内容および支援を提示する機会をもたなければ意味がない。なかでも外国籍の方々を招聘するにあたっては、言葉の壁の問題も生じてくる。場合によっては英文でのメールのやり取りも必要であろう。今後広く現場での実践を見据え、本実践で活用したネットワークを提案したい。本実践では、NPO 法人や千葉大学、国際交流ボランティア団体、JICA などに対応していただいた。いずれにしても、関係各位との幅広いインフラを構築することが人的資源の有効活用には欠かせない。

## 4. 研究の仮説

以上のような研究の背景を受けて、国際理解に関する学習とキャリア教育を関連付けた総合的な学習の時間の工夫・改善をねらって以下の二つの仮説を設定した。

仮説①：国際理解に関する学習とキャリア教育を横断的に関

連させ、学習過程に「かかわりあう力」を高める手立てを構成すれば、学習意欲が向上し、学びが多様に広がるだろう。

仮説②：自己理解を深めたり、他者や社会とよりよくかかわったりすることが課題設定につながり、探究の学びをスパイラルに継続していく実践的な子どもが育つだろう。

## 5. 検証授業の指導計画と分析の方法

仮説検証をするために、千葉市立小中台小学校6年生に以下の単元で実践した。

### 5.1. 単元（ユニット）：総合的な学習の時間

「We Love the Earth〜グローバル・コミュニティ・プロジェクト〜」

### 5.2. 単元（ユニット）の目標

( )・・・観点、【 】・・・キャリア教育の能力視点

○自分を取り巻く環境やキャリアアドバイザーとの交流体験から問題を見つけ、関心をもち、計画を立てて様々な活動をしようすることができる。

(関心・意欲・態度【コミュニケーション能力】)

○自ら課題を設定し、目的に応じて情報を収集・整理して課題を解決し、自分の考えをまとめることができる。

(課題解決力【課題解決能力、情報収集・探索・能力】)

○自分が知りたいことを調べるために、内容や目的に応じて主体的に友達やキャリアアドバイザーと関わりながら調べることができる。

(人間関係力【コミュニケーション能力、自己管理・選択能力】)

○調べたり考えたりしたことをわかりやすい方法で、効果的に伝えるように表すことができる。

(表現力【情報収集・探索・実践能力】)

○学習したことを自分の生活に生かし、自分の考えをもって行動したり、自分の願いや思いを実現しようしたりすることができる。

(自己の生き方【自己管理・選択能力、課題解決能力】)

### 5.3. 評価規準

ア 関心・意欲・態度	異文化理解を推進する人や、外国の方々に興味・関心をもち、そこから自分たちが解決すべき問題をつかみ追究しようとする。 【コミュニケーション能力】	イ 課題解決	日本に住む外国の方々が抱える様々な問題や世界の問題に気付き自分の考えに基づいて解決のために努力しようとする。 【課題解決能力】 【情報収集・探索・実践能力】
カウ 人間関係	学びの中で出会う様々な他者とよりよくかかわりながら、自分の役割を認識し、学ぼうとする。 【コミュニケーション能力】 【自己管理・選択能力】	エ 表現力	身近にいる外国人の友だち、異文化理解を進め共生についての理解を深め、自分たちでできることを考え伝えたり、広めたりしようとする。 【情報収集・探索・実践能力】
方オ 自己の生き	国際理解に関する社会の現状や問題点をとらえるとともに、自分たちでできることを考え、進んで実践しようとする。 【自己管理・選択能力】 【課題解決能力】		



5.4. 単元（ユニット）の流れ・内容・ねらい

自己理解・他者理解を促進するようなキャリアカウンセリングを導入に行い、かかわりを深める手立てとして、インタビューの専門家であるプロの新聞社の記者との連携を図った授業とした。さらに、課題意識を持たせる工夫として、キャリアアドバイザー（異文化交流の専門家、途上国支援者、国際社会で仕事をされている方）とかかわりあう場の設定をした。これは、単に異文化体験で学びが収束しないよう現実の世界の問題に出会わせ、ゲストの生き方と触れあうことが、より実践的な態度や能力の育成に寄与できるものと考えたからである。また、同時に学習過程における友だちとのかかわりあいにも重点を置き、個人の願いを尊重しつつ協同的な学びを構成する方策として、課題別ゼミナール方式の手法を学びの過程に織り込んだ。

5.5. 検証の方法

一連のプログラムのなかで、児童の学びに対する意欲の変容を、ふりかえりカードを中心に検証した。自由記述を中心にした質問紙法ということもあり、分析にあたっては、表2、3のようにコメントカードを4つの段階に分類し、それぞれの段階の児童数の推移をもって効果を検証することとした。個々の児童の自己評価力に差がみられるため、その指針としては、大西智子（香川県教育センターH15）の先行研究を参考に、自己内省力<sup>4</sup>の見取りの規準を独自に設定した。

表2 学びの過程における自己内省力の見取りの規準

段階	見取りの規準
A 段階	B 段階を踏まえ、加えて今後の見通しをもった記述がみられるもの
B 段階	C 段階を踏まえ、さらに学習活動全体を俯瞰した学びの過程の立ち位置（疑問点、進度）の記述がみられるもの
C 段階	学習活動を通して現状（わかったこと、がんばったこと等）の記述がみられるもの
D 段階	学習活動の感想のみの記述がみられるもの

表3 かかわる力における自己内省力の見取りの規準

段階	見取りの規準
A 段階	B 段階を発展させて、今後の課題につながる内容の記述がみられるもの
B 段階	C 段階を踏まえ、さらにかかわりから自らの考えを加えている記述がみられるもの
C 段階	学習活動を通してかかわり（友達やゲスト）についての記述がみられるもの
D 段階	学習活動について内容が未整理・未構成のままの感想の記述がみられるもの

6. 検証授業の分析と考察

6.1. 「かかわりあう力」を高めるためのキャリアカウンセリングワークとインタビュー活動

単元の導入に、齋藤めぐみ氏<sup>5</sup>を講師に迎え、キャリアカウンセリングワーク行った。児童が自分自身・友達について、現在や未来の自分自身と対話する学びである。

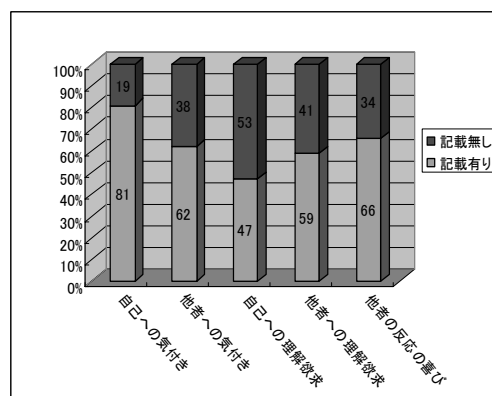


図5 振り返りコメントからの児童の実態

振り返りコメントからの児童の実態(図5)を分析すると、他者への気づき(62%)に対し、自己への気づき(81%)の割合が高く、より自己をみつめることができた児童が多いことがわかる。また、自己への理解欲求(47%)よりも友達のことをもっとよく知りたいという他者への理解欲求(59%)が高い。多くの児童が、コメント(資料1)からみられるように、友達が自分に対して想定外のイメージを持っていたことへの驚き(44%)や、かかわりあうことへの関心の高まり(68%)、新たな自己の気づきへとフィードバックしていく心地よさ(52%)を実感したと捉えてよいだろう。導入時にこの活動を取り入れることで、自己の適性を理解し、他者と共感的理解を深めていく力を伸ばすことができた。さらに、「もっと深く知りたい」という記述(次頁資料2 強調線)には、友達とよりよくかかわり学んでいこうとする前向きな気持ちが醸成されていったことを表している。

次に、友達だけではなく、実社会の方々ともよりよくかかわれるように、インタビュースキルの向上が不可欠と考え、読売新聞社とNPO 企業教育研究会との連携授業による「ことばの授業」に取り組んだ。実社会でインタビューのプロとして働く大人の姿やそのスキルを学ぶことで、国際交流を進めている方々とかかわりをより深いものにしたたり、具体的な課題につなげたりすることができるようなインタビューの向上がみられた。

資料2 キャリアカウンセリングワークの児童のコメント(一部抜粋)

- 知っていると思っていた友達のことも新発見が多くてびっくりしました。知っているつもりでも知らないことがあり残念でした。でも知らないのならば伝えればいいのだから、これからも友達とたくさん話して、もっと深く知りたいと思いました。
- 友達ともっとたくさん遊んだり、勉強したりして、友達のいいところや自分のよさをみつけようと思いました。
- 今日は自分の心をつめて、「私のこういうところが好き」という気持ちが前より強くなりました。だから、もっと自分を大切にしようと思いました。
- 今まで知らなかった自分が今日少し出てきたなと思いました。

6.2. キャリアアドバイザーとのかかわりあいをもたらす内発的な動機づけに関する教育効果

内発的な学びへの動機づけから課題意識を持たせる工夫として、また共感的に学習に取り組ませる手立てとして、意図的に実社会のキャリアアドバイザー(ここでは主に途上国支援や異文化交流の専門家、海外と輸出入の仕事をしている方、

在日の外国人)の方々との出会いの場を設定する。異文化理解ワークショップと題して、前述のインタビュースキルを生かしながら、世界の人々が共生していくためにはどのような問題点があるのか、そのためには何が必要か、その方法を課題とした。授業後の振り返りから、どのようなゲストに興味関心を持ったかを表したのが図6である。

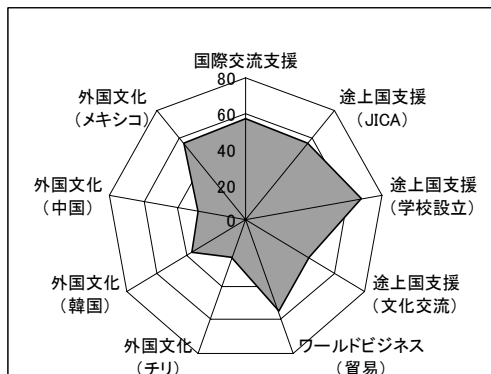


図6 ゲストに対する興味関心

異文化理解を促すために在住の外国の方々もゲストとして招聘したのであるが、分布図から外国人ではなく日本人の国際交流や途上国支援を行っているゲストの方々に高い関心を示していることが読み取れる。これは、課題設定のフィルターともいえるワークショップのなかで、多くの児童が「異質」なこととの出会いより、外国との共生の取り組み(生き方)に関心を向けていることがわかる。つまり、実社会の裏に潜む問題や課題にこそ学びの価値を見出している表れであろう。このように、自分と異なった視点・考え方を持つ人との出会いが、学びの場に「多様性」をもたらし、彼らの「生き方」に触れる機会ともなり、結果として課題設定への動機付けにつながっていった。

また、表3の「かかわる力における自己内省力の見取りの規準」に基づいて児童の振り返りコメントを分析してみると、図7のように変容が見られた。

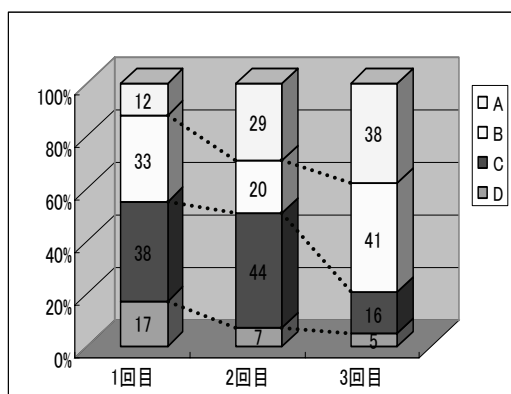


図7 かかわる力における自己内省力の変化

1回目はキャリアカウンセリングワーク後、2回目は読売新聞社との授業、3回目は異文化理解ワークショップでのゲストとの「かかわる力」の自己内省力の実態を表したグラフである。全体的に俯瞰してみると、1回目から3回目にむけ

てC、D段階の児童数が当初の約5割から減少傾向を示し、A、B段階の児童数が約5割から約7~8割へと増加している。これは、ゲストとのかかわりを経て、徐々に自己の気づきや自己の考えが深まっていった児童が増えたということを示している。特に3回目については、A、B段階の児童の合計が全体の8割を越えており、顕著に自己内省力が高まっていることがわかる。

### 6.3. 友だちや教師との意図的な「かかわりあい」の場の設定の教育効果

キャリアアドバイザーとのかかわり同様、友だちや教師との「かかわりあい」も学びを深める要因となる。毎日生活や学習を共にする仲間でも、思いや願いは違おうであろうし、友達との意見の交換、情報の共有、考えの深め合いは、学習の視点や方向性を明確にする。つまり協同的な学びにつながり、スパイラルな学びの連続性に寄与する重要な要件である。具体的な手立てとしては、いわゆる大学等で用いられるようなゼミナール方式の学び合いの場を提供するものである。ゼミナール方式とは、学級集団を撤廃し、似た学習課題をもったもの同士がゼミチームとなり、必要に応じて自らの学びを報告し、意見交換やアドバイス、指導者からの支援をもらう場である。追究の過程において「自分の課題をどう突き詰めていったらいいのかわかる?」「詳しい人は?」「どんな資料が必要か?」「だれに伝えたいか?」示唆を与え合うようなかかわり合いの場である。

図8は、学びの過程における自己内省力の変容を表したものである。

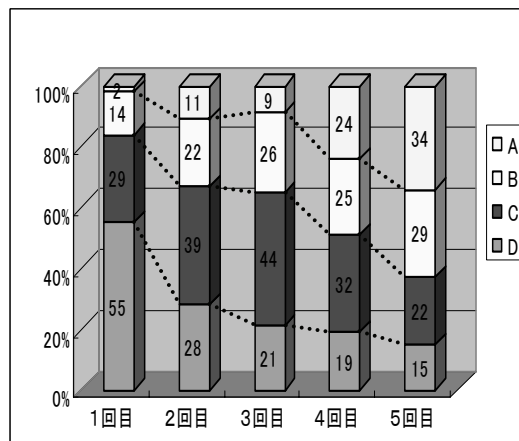


図8 学びの過程における自己内省力の変化

D段階は、感想のみの記述をした児童数であるが、学びの過程が進むにしたがって徐々に減少傾向にある。反対に、A、B段階は疑問点、進度、今後の見通しなど(資料2の規準から)を記述している児童数を表しているが、4、5回目に至っては、半数以上がこの段階に属している。これは、自身の学びを個人で進めながらも、学び合いが学習の視点や方向性を修正していったり明確にしていったりした反応が振り返りの記述に表れたものと考えられる。3回目のC段階の児童が増加している事象については、詳細な分析が必要であると考えられるが、全体的な傾向として、「友だち」「先生」への「かかわりあい」のアプローチは、既成概念を修正し、視野の広がりや、自己を見つめ直す自己内省力の成長へつながっていった。

#### 6.4. 実社会の多様な人材活用が生み出す学びの日常化や学びの連鎖

総括すると、単元全体を通してキャリアカウンセラー、読売新聞社、保護者、異文化交流を進める方々などの多様な実社会のゲストの生き方に触れるような単元構成は、価値ある課題設定や追究の質を高めた。(ア) (イ) で述べたように多様な人材活用は、自己理解・他者理解を促進し、学びの動機付けに効果が見られた。

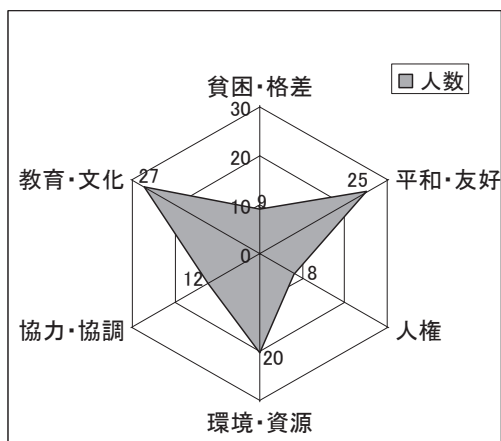


図9 まとめからみえるテーマ分布

図9は児童のまとめをもとにしたテーマの分類の分布を示したものであるが、平和・友好や環境・資源、教育・文化をテーマにした児童がそれぞれ20%を越え、貧困・格差にかかわるテーマをまとめた児童も約10%みられた。ともすれば外国文化の紹介でとどまってしまうがちなテーマが、本実践を経て、環境・資源の問題、貧困・格差の問題、人権問題、平和・友好の課題という、他教科・領域にまで広がる質の高まった課題を追究していた。

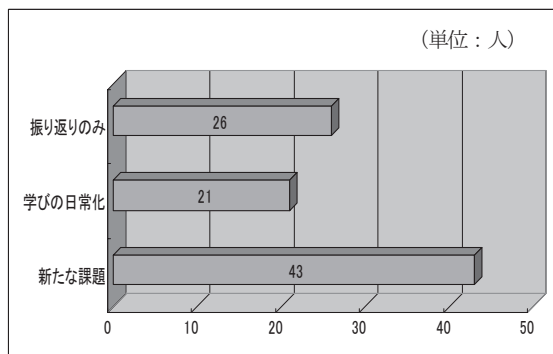


図10 コメントカードにみられる学びの連鎖

また、単元全体の学びの振り返りでは、図10と資料3のように「もっと調べる機会がほしい」というような新たな課題を発見している児童が43%もみられた。

#### 資料3【単元全体の振り返りコメントから】(一部抜粋)

- 「世界って広い」…中略…生活やその土地の風土、世界の問題などもっと調べる機会がほしいなあと思いました。
- 児童労働について何も知らなかったけど、調べたことをもって伝えて、現状を知る人が増えたらいいなと思いました。
- 環境問題について調べ…中略…環境のことを考えて、徒歩、省エネなどすぐできることを始めたいと思いました。
- 前は短くなるまえに鉛筆は新しくしてし…中略…短くなっても大事に使っているネパールの子どものことを調べて、使える

また、「～のために、すぐできることをはじめたい」といった日常化がみられるコメントも21%みられ、「人」とのかかわり合いに重点を置いた学習過程が、学びの意欲の向上を生み、学びの日常化や学びの連鎖につながっていったことがわかる。

### 7. 研究のまとめ (成果と課題)

#### 7.1. 成果

学習過程の中で「かかわりあう力」を意識した単元構成をしたことが、自己内省力の経過分析から学習意欲の向上に寄与することが明らかになった。また、自分と異なった視点・考え方を持つ人との出会いを創出することは、学びの場に「多様性」をもたらし、「生き方」に触れる機会ともなり、価値ある課題設定や追究につながっていくことが明らかになった。特に、課題設定に重点を置き、協同的な学びの手法をとることが、多くの児童に「詳しく知りたい」課題の発見や、「学びの成果」の日常化がみられた。本研究における取り組みが、児童の実践的な態度の育成と学びの連続性につながるという教育効果が上がったといえる。

#### 7.2. 課題

総合的な学習に時間では、国際理解に関する学習を窓口にするだけではなく、他のカテゴリーでの実社会や実生活と双方向にかかわりあう学びを模索していく必要がある。特に発達段階に応じたキャリア形成を意図的に総合的な学習の時間の計画に織り込んでいくような教育課程の編成をすることが重要である。

また、自己内省の評価をさらに個人に即した具体的なものに高めていくにはどうすればよいか検討の余地があることと、個に目を向けた評価からの適切な支援をどのように行っていくかについてはさらにつきつめていく必要がある。

#### 【主な参考文献】

- 文部科学省 『キャリア教育の推進に関する総合的調査研究協力者会議報告書～児童生徒一人一人の勤労観、職業観を育てるために～』2004/1/28
- 国立教育政策研究所 『児童生徒の職業観・勤労観を育む教育の推進について (調査研究報告書)』2002
- 国立教育政策研究所[編] 『キャリア教育への招待』東洋館出版社2007
- 経済産業省 『社会人基礎力に関する研究会～「中間とりまとめ」～』2006

- 上越市教育委員会、上越教育大学『上越市キャリア教育テキスト「生きる力」「学ぶ力」「働く力」を育むキャリア教育』2006
- 千葉市教育センター『生き方学習に関する研究』2005～2008
- 千葉市教育センター『実践！キャリア教育ガイドブック』2008
- 川端邦彦『小学校の総合的な学習の時間におけるキャリア教育の有効性に関する考察』（学校教育研究）
- 藤川大祐『企業とつくるキャリア教育』教育同人社2006
- 三村隆男『キャリア教育が小学校を変える！沼津市立原東小学校の実践』実業之日本社2005
- 吉田辰雄 篠 翰『進路指導 キャリア教育の理論と実践』日本文化科学者 2007
- 開発教育協会『参加型学習で世界を感じる～開発教育実践ハンドブック～』2003
- 大西智子『生徒の自己評価力を高める方策についての研究』香川県教育センター2004
- 田村知子、大島まな『留学生を活用する国際理解教育の内容・方法と教育効果に関する研究(その2)』九州大学2001
- 家亀照夫『「総合的な学習の時間」における自己評価力を伸ばすための「ワークシート」の利用研究』2006川崎市総合教育センター

---

1 本研究は2008年度に委託研究生として千葉大学教育学部在学中に、在籍校である千葉市立小中台小学校において実践した研究である。

2 「生きる力」(2008) 中央教育審議会教育課程部会答申パンフレット

3 小学校学習指導要領解説 総合的な学習の時間(2008)

4 自己内省力とは「今、自分がいる位置」を考え、「いままでの過程」を整理し、そして「これからの指標」を立てる力と定義する。自己評価力を学習場面に即して具体的にしたものであり、自己内省力の各段階の人数の変化をもとに意欲が向上したかどうかを捉える指針。

5 GCDF-Japan キャリアカウンセラー。進路指導、キャリア教育、就職活動支援などのワークショップや授業の企画・運営サポートを幅広く活動している。